

車窓から見上げる川―田辺の天井川―

門田 誠 一

天井川

「天井」も「川」も子供でも知っている単語だが、その二つが組み合わさって「天井川」となると、いささか説明を要する言葉になってしまう。

地理学の辞典で調べると、河床面が周囲の平野面より高くなっている川であり、扇状地の河川や崩壊しやすい岩石からなる山地から流出してくる河川をもつ平野で、土地利用に伴い築堤が進むにつれ出現してきたもので、堤防で河道を固定すればするほど、河床内の堆積がすすんで、河道が上昇し、平野との比高差が大きくなる」と説明されている。

田辺校地の周辺にも、防賀川、天津神川、普賢寺川などの天井川があり、私たちは、いつも、その下を無意識に通っている。道路や線路の上を横断しているコンクリートの用水路のように見える天井川は、じつは

自然と人間との長い闘いの痕跡である。その闘いがいつからはじまったかは、天井川がいつごろ形成されたかという問いに置きかえられる。

形成の時期

これまで南山城地方の天井川が条里制の地割にのり、古代にまでさかのぼるといふ通説があった。最近では、防賀川改修工

の際に、露出した断面の観察や、遺物の採集がなされている。その結果によると、現在の水田面より約五〇センチ上部で、近世前期の川床と考えられる粘土層が見られ、堤防の盛土のなかには一九世紀の遺物が含まれているという。また、旧流路の位置から、鎌倉時代には防賀川の流路が一定していなかったともみられている。これらのことから、防賀川は室町時代から江戸時代にかけて、次第に天井川化したと考えられている。(京都府立山城郷土資料館「惣村から近世の農村へ―綴喜郡東村の歴史―」一九九〇年)

地理学では、天井川の形成と連動するものとして、田辺町浜新田集落の成り立ちが検討されている。浜新田集落の屋敷地は、周囲の水田より約三・五メートルも高く、水田に浮かぶ孤島のように点在する。これは木津川左岸の堤に近く、両側を防賀川と天津神川によって囲まれているため、地形を克服するため、盛土によって屋敷地をすこしずつ高めていったことによると考えられる。浜新田集落の盛土については、土層



興戸駅から見た防賀川

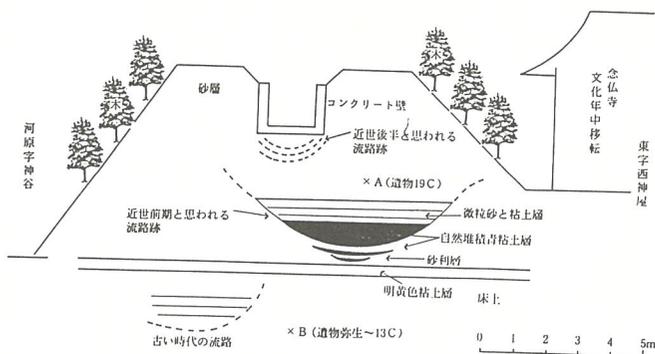
サンプル採取による自然地理学的な調査が行われていて、その結果からは屋敷地の地表下一三〇センチの間で土師器の破片が混入する層が確認されている。史料によると浜新田に人が住み着きはじめた時期は寛永八（一六三一）年よりはふるいことがわかっている。また、江戸時代のはじめ頃は、淀川や大和川など、近畿地方の大

河川の上流で山林の荒廃が広がり、洪水の際に土砂が川に流れ込み、川床の上昇を引き起こしていたことを示す史料も残っている。これらの史料と浜新田の土層堆積物の観察とによって、江戸時代のはじめ頃、浜新田の地は田辺丘陵の末端に広がる扇状地から少し離れた木津川の中洲状の微高地であったが、木津川の川床の上昇による洪水や滞水への対策として、屋敷地のかさあげがくりかえされ、その時の盛土に土師器の破片がふくまれていたと考えられている。（日下雅義『古代景観の復原』一九九一年）

河道の固定化と上流の山林荒廃による木津川の川床の上昇、木津川に注ぐ河川の木井川化、浜新田の屋敷地の盛土の形成という三つの因果関係からみた自然地理学の研究成果からは、天井川の形成時期について一七世紀の初めから前半という年代の一端が得られる。

なげかける問題

木津川支流の天井川の形成については、



防賀川断面概略図

さらに、考古学や地理学の将来の検討に負うところが大きい、我々が日常の生活の中で考えねばならない現代の問題もはら

でいる。近年、山林の保水力の減退を原因とする河川災害や生態系の変化にともなう農業、水産業への影響などがとりざたされる。天井川の形成にも上流の山林の荒廃や破壊という原因が考えられ、現代の環境問

題の歴史的起点としてとらえることができ。これは日本に限ったことではなく、世界最大の天井川である中国・黄河流域の砂漠化に代表されるように世界的な問題である。自然を克服することだけが文明であり、

繁栄の根源であるという単純な考え方で、人類が未来を模索するならば、それには考え直す必要があることを教えながら、天井川は我々を見下ろしている。

(本部施設課埋蔵文化財委員会調査主任)

上理似寒梅
敢浸風雪
新島襄

新島襄の色紙の影本を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に日常接する機会は少なく、せめて複製された色紙でも欲しいとのご要望にに応じて、色紙の影本を、四点作成頒布いたしております。

この影本は、明治二二年秋から二三年春

にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだもので、同志社関係者のみでなく、一般社会にも強く訴えるものがあると思います。

◎ 色紙(影本)

一葉一、〇〇〇円

(A) 「真理似寒梅」

敢浸風雪開」

新島が同郷の後輩深井英五に与えた色紙。漢詩「庭上一寒梅」とともに広く愛

唱されている。

(B) 「時危思偉人」

明治二二年一月徳富蘇峰の依頼に応じて揮毫されたもの。

(C) 「不止月下併能越 豈涉八州是我分

壯圖却促男兒淚 滴々跋為縷々文」

明治二二年二月二八日新潟伝道に従事していた卒業生広津友信におくられた詩。

(D) 「送歳休悲病羸身 鷄鳴早已報佳辰

劣才縦乏濟民策 尚抱壯図迎此春」

明治二三年一月一日大磯百足屋で春を

迎えて詠まれた。

◎ 購入ご希望の方は左記へ、直接電話または文書でお申し込み下さい。

◎ 代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから、後日ご送金ください。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入

電話(〇七五)―二五一―三〇三七・八